

先日、研究室の学生が足を痛めたらしく、松葉づえをつけて大学にやってきた。一体どうしたのかとたずねると、原因は数学の研究だという。

学生によると、数学の問題を一晩中考えていたら、明け方の四時ころにある解法がひらめいた。ついに解けたと思いい、あまりのうれしさに興奮して部屋の中で跳び上がったところ、着地に失敗してねん挫したそつだ。

彼が考えていた問題は「ゼータ関数の3における値の表示」。一七〇〇年代に数学者オイラーによって提唱されて以来、未解決の有名な整数論の問題だった。

数学には数百年間も未解決の問題がいくつもある。それらを解くことは数学者の夢であり、たった一つの問題に生涯を費やし果たせなかった者は数知れない。人類が長年解決できなかった問題がまさか自分に解けるはずはないと、誰しも思うのだが、考え続けるうちに問題にひき込まれていく。昼夜を問わず没頭するが、なかなか解決の糸口すら見えてこない。

## 考える姿勢育てる

### 大学教育の原点

発想の行き詰まりに悩みながらも考え抜く。こうした葛藤（かっとう）はすべてのテクノロジの基礎研究に共通する。学問を発展させる一つの原動力はそれに携わる一人ひとりの純粋な好奇心だ。大学の理工系の学部は社会に有用な最先端のテクノロジを追求すると同時に、夢を追求し続ける場所でもある。

だが、悲しいことに多くの場合、研究者の興奮は勘違いに終わる。先の学生も、結局は解決に至らなかった。

華やかに見える最先端の研究を裏で支えているのは失敗と試行錯誤である。研究者がこれらを乗り越え成果を上げるには、純粋な好奇心と考え抜く力が不可欠だ。

大学は感動を与える場所であるべきだ。若い人々が潜在的に持つ純粋な好奇心を刺激し、考え抜く姿勢を育てなければならぬ。テクノロジ万能時代を終え価値観が多様化してきた今こそ、大学の原点を教育の視点から問うことが求められている。

（慶応義塾大学理工学部助教

授 小山信也）